

フィールドワーク便り

思いの交錯する場

—タマン語識字教室に通う女性たちと日常生活をともにして—

安 念 真衣子 *

「次はマイコの番ね、この文字読める？」

「ka, kha…」一斉に笑いがどっと起きる。少しずれた拙い発音に対してか、あるいは外国人と一緒にタマン語を学んでいる状況に対してか。

ここでは、調査地であるキュイ村で出会ったタマン語識字教室に通う女性たちについて紹介したい。

キュイ村へ

キュイ村は、ネパールの首都カトマンズから東へ50 km程の所に位置する。村の近くには、中国国境へと続く幹線道路が通っており、バスで3、4時間で首都に出られる都市

近郊の農村地域である（写真1）。

ここを初めて訪れたのは、2011年1月、識字教室の調査が目的であった。カトマンズからバスを乗り継ぎ、幹線道路から歩くこと1時間。外国人が来ることはあまりないらしく、視線を一斉に浴び、仕草から言動まで観察されているようであった。

公用語であるネパール語を学び、村を訪れた私にとって、耳に入るのは聞き慣れない言葉だ。どうやら私に関する情報は、タマン語で交換されているらしい。どこから来たのか、何しに来たのか。恥ずかしがりの村の人たちは、私の調査協力者であるミナにタマン語で聞き、私も交えて会話するときはネパール語に切り替えているのだ。

タマン語はチベット・ビルマ語族の言語で、話者数は100万人超とされる。ネパールでは5番目に多く人口の5%強を占める。この地域ではタマン語が共通語のように使われるとはいえ、大抵の人はネパール語も話す。多言語状況にあるネパールでは、人々は2言語以上を操るのである。村内でも、タマン語で会話されているかと思えば、相手によってはネパール語で、さらにテレビをつけ

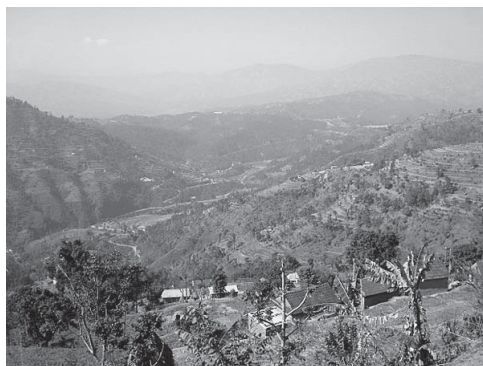


写真1 段々状に広がる村の風景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

るとヒンディー語のドラマが流れるといった具合である。

一方、読み書きではデバナガリ文字のネパール語が最も一般的であり、チベット文字表記のタマン語も時にみられる。識字教室で習得の対象となっているのは、デバナガリ文字のタマン語である。

女性の仕事

キュイ村では、私はいつもミナと行動をとりにした。土地勘をつけるためと「ミナの友だち」と覚えてもらうためである。そのため、女性たちと一緒に仕事をしながら、話をするようになった。

ミナをはじめ村の女性たちのパイタリティは底知れない。早朝、鶏の鳴き声と競るようにして起床したかと思えば、牛の乳搾り、餌の草刈りなど朝から忙しい。日が昇る前に一仕事してしまうのだ。

日中は、畑作業やコド（シコクビエ）打ちなどその日の作業を行なう（写真2）。収穫したコドの穂を家の前に広げ、日光に当てて乾燥させる。それを身長よりも長い棒で打っていく。凸凹の地面に対して平行に棒を振り下ろさなければ、コドの実は殻から剥き出てこない。背筋を使って体を反らせ、一気に腰を屈めて振り下ろす。まさに、腕、腰、背中、足を使う全身運動である。私も微力ながらやらせてもらったが、普段パソコンや本に向かうことの多い私にとって、10分もすれば十分に筋肉痛ものである。そのうえ、打った途端に乾燥したコドの実の殻が空気中に舞い上がり、全身にふりそそぐ。「かゆくなる



写真2 コドの脱穀作業

からもうやめなさい」と言われて交代し、隣で行なっている莫莖作りを手伝った（写真3）。

縦方向にプラスチックの紐を固く張り、それに藁を編み込んでいく。適度に水をかけて藁が折れないように湿らせ、それを右左から交互に縦紐に編み込んでいくのだ。ギッチリと固く張っているだけに、半分ほど編み上げると、中指と薬指に豆が出来る。背中と首筋に太陽の光を浴びながら、そして「カン、カン」と鳴るコドの実打ちの音を聞きながら、黙々と編み続け、夕方には1枚の莫莖が完成した。「売り物になるから、明日ももう1枚編んでね」との言葉に良い気になったものの、疲れ果てた私を待ち受けるのが、夜の識字教室であった。

識字教室の場

夕食を終え辺りが暗くなった頃、LEDライトを片手に教室へと向かう。

もともと住居だった建物は、現在は1階が家畜小屋、2階が教室兼物置として利用されている。

軋む階段を上ると、所狭しとウモロコシ



写真 3 莫菴作り

の皮が散乱し、部屋の奥には収穫したトウモロコシが積まれている。米とともに主要な穀物であるトウモロコシは雨季に収穫し、乾燥させて保管する。そして年間を通して、人、牛、山羊、鶏が、挽いた粉を食し、皮は家畜の敷物に、芯は薪として使用される。

土壁にはホワイトボードが掛けられ、ポスター紙が貼られる。1つ、時間集まること。2つ、19時15分に始めること。3つ、お酒を飲んで来ないこと、もち込まないこと云々、記された教室のルールはなかなか興味深い。

女性 10 人程が車座になると部屋はいっぱいだ。膝と膝を押し合いながら、座る所を確保する。

まずは雑談。この外国人は誰かといういつもの話題に加え、その日の出来事や、村の青年による駆け落ちの話へと展開していく。ひとしきり話のはずむと、お決まりの復唱が始まる。学校でしばしばみられる、先生の後に続いて、教科書を音読する学習法である。

クマリ（28 歳女性）は、恥ずかしがり屋だ。外国人で見知らぬ私がいるからだろうか。「言わないなら、歌を歌いなさいよ」と

周りの女性たちに煽られながら、先生とやりとりする。

クマリの横では、アサ（30 歳女性）が、重そうな瞼でこっくりしつつ眠気に抗っている。早朝起床し、牛や山羊の搾乳、餌用の草刈り、牛糞を家の壁や土間に塗る掃除、トマトの収穫や豆撒きの畑仕事、薪割りと食事の用意…と数々の仕事をこなした彼女たちの 1 日の最後にあるのが識字教室に行くことなのだ。教室で淡々と繰り返される復唱の様子や教科書の内容、そして 1 日の仕事を見ていると、この地で生きる彼女たちの生活にそれがどのように役立つものなのだろうか、疲れた彼女たちはどのような思いで教室へ足を運んでいるのだろうか、とふと思うのである（写真 4）。

アサの語り

「誘われたからただ来ているだけよ。」

アサは識字教室の話聞いて回る私に対してそう語った。しかし、何度か会ううちに彼女から聞いた話は異なるものであった。

「旦那は、教育を受けた奥さんがいいと言って、もうひとり奥さんを作りカトマンズにいろ。悔しくて、識字教室に来ているわ。」

滞在中に次第にわかってきたことであったが、ここでは 2 人の配偶者をもつことは特異なことではないようだ。アサの他にも、教室に来ている女性の中には、同様の体験をしている人がいる。

「1 人目は仕事のための担い手と結婚、2 人目は自分の好きな人と結婚する。だから 2



写真 4 車座になる学習者たち

人目は大切にされるんだけど、1人目は大変なのよ。隣の家のアサ、上の家の人、あの家の人も。私は2人目だけだね。」

ミナの経験

調査協力者であるミナも同様の経験と無関係ではない。ミナは、NGOのスタッフとの個人的な繋がりをもっていて、識字教室の開催にも寄与した人物である。

ミナは幼い時に母親を亡くしている。彼女の母親は、父親の2人目の妻であった。後妻であるミナの母親が亡くなると、父親は前妻のところに行ったきりになってしまい、彼女は兄、2人の姉とともにキュイ村での生活が続けた。農作業、家事等を行ないつつ彼女は学校に通った。学校をやめる話もしたが、「勉強は続けなさい」と兄に叱られ、兄夫婦と姉が経済的な支援をすることで、大学にも通った。早朝に村から2時間かけて通うこともあったし、忙しい時には、街にいる父親の家に滞在した。しかし、そこには、前妻方の親戚、子どもたちが20人近く生活しており、一切の家事がミナに回ってきたのだ。

「村にいても街にいても、仕事は多い。でもどうせ仕事をするなら、昔から住んでいてよく気の知れた人が多い村の方が好きなのよ。それに、兄夫婦には助けてもらったから。村の仕事はたくさんあるし、少しでも義姉の助けをしたいの。」

彼女は村での生活を好み、可能な限りキュイ村から通い、この春彼女は大学を卒業した。

識字教室の女性たち

教室に集まる女性たちには、当然のことながら、それぞれさまざまな経験や個人的な事情がある。

NGOとの繋がりをもち、識字教室の開催に尽力したミナや、夫が語る「教育を受けた女性」への羨望をもつアサ。「実は学校も少し行っただけだね」と言いながらも教室に通い、「ka, kha…」と文字の復唱を行なう女性。あるいは、識字教室に対して、ネパール語の習得を目指す学校教育の場ではみられない「タマン語の扱われ方」、すなわち、「(私たちの)タマン語も、ネパール語と同等で、学習するに値する言語だ」という喜びを表現する女性。一方で、ネパール社会で生活するうえでタマン語学習はどれほど重要なのかと疑問視する声。

そんなさまざまな思い、期待、楽しみ、不安を交錯させながら、女性たちは日々教室へと向かうのだ。

後日、ミナはNGOへ就職が決まり、カト

マンズへ生活拠点を移すことになった。

村での彼女の働きぶりは目を見張るものがあり、彼女のそんな姿勢が認められたともいえる。あるいは、調査協力者として「外国人と良い関係をもった」ことが、NGO にとって評価のひとつになったのかもしれない。村の人からすれば、「カトマンズに住み、オフィスで働き、現金収入が得られる」ようになるミナは「大きな出世をした」と見做されるだろう。

日本で連絡を受けた私は、嬉しさとともに

素直に喜べないところもあった。「教えてもらい、学ばせてもらう。」そんな、あくまで「村の人から学ぶ」という姿勢でいた一介のフィールドワーカーが、いつしか、影響を受けるだけでなく、良くも悪くもその人々の生活に絡み付いている、という現実を知ることになったのだ。

「フィールドにいる」こと。そこからすでに、村の人とのインタラクションは始まっている。

「首ふり病」と暮らす人びと

—ウガンダ北部における「奇病」の蔓延—

川 口 博 子*

2011 年 11 月ごろ、ウガンダ共和国のアチョリ・ランドで「奇病」騒ぎが始まった。インターネット上のいくつかのニュースサイトに取り上げられ、ウガンダ国内でも新聞やラジオ、テレビ番組は、連日関連ニュースやトーク番組でもちきりとなった。この奇病は、「首ふり病 (nodding disease)」と呼ばれており、発症の初期に患者は、食べ物を目の前に置かれると首を「こくこく」と縦に振り始めることに由来する。症状が進行すると昏倒、痙攣、麻痺などが起こり、成長が阻害され、言語障害を起こすこともある。発狂して走り

出し行方不明になることや、発作のために意識を失ったまま死亡することもあるという。

地元新聞である *Daily Monitor* によればウガンダ北部のキトゥグム県、ラムオ県、パデー県を中心に約 3,000 人の事例が報告されており、すでに 200 人が死亡している。20 歳未満の子どもへの感染が全体の 90% 以上である。原因は、ウガンダ政府やアメリカの CDC (Centers for Disease Control and Prevention) など外国の機関も含めて調査に入っているが未だに不明である。流行地域が川の近くであることから、河川盲目症を引き

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科